

# 園のおたより



第 1 号

令和 5 年 4 月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

## だんごむし

園長 関 由起子

保護者の皆様、4月に埼玉大学教育学部から赴任いたしました関由起子と申します。大学では養護教諭（保健室の先生）を目指す学生に、主に保健や看護について教えています。幼児教育に携わるのは初めてですが、保護者としての経験はあります。ですので、園での出来事を保護者プラスα目線でお伝えできればと思います。よろしく願いいたします。最初のテーマは、“だんごむし”です。

「えんちょうせんせい、きて!」、就任して初めてこどもから声がかかりました。うれしくなり行ってみると、たくさんのだんごむしが入れ物の中で蠢いています。「そうだった、ここは幼稚園。虫が苦手なんて言っていられない」と心の中で思いました。この日1日だけで、だんごむし、わらじむし、はさみむし、何かの幼虫? 何かの羽虫? をこどもたちは私に見せ、しっかり解説してくれました。

私の娘はすでに成人しているのですが、保育園児の時、大量のだんごむしとミミズを紙コップに入れ自慢気に見せてまわり、保育士さんたちを驚愕させたことがあります。こどもがだんごむしを好んで捕まえる理由を誰か（おそらく何かの専門家だったと思います）に聞いたところ、まだまだ器用に動かない手で捕まえることが出来る虫はだんごむしだからだそうです。確かに、動きがゆっくりで手で触ると丸くなり動きが止まるなんて、なんて素敵な生き物なんでしょう。このように、ちいさな手で虫や花と触れあいながら生物の多様性を感じ、そして自分も地球にいる生き物であることを実感していくのではないかなあと園庭でしみじみと感じました。

この日の出来事を娘に話したところ、「だんごむしはこどもにとって宝ものだから、宝ものを見せてもらえてよかったじゃない」と言われました。娘はまだこどもの心を忘れていなかったんですね。今日もあちらこちらで「だんごむし」という声が聞こえてきます。きっと、だんごむしは私よりも、こどもと遊ぶの上手なんですね。



## 「遊び」とは何でしょうか

3月に昨年度の3組（5歳児）の卒園を見送り、4月に新たな入園を迎えることができました。職員も数名の別れと新たな出会いがありました。幼稚園という場で、毎年行われることですが、気持ちを新たに作る時期と感じています。

さて本園では、日々の保育活動と合わせて、教育実習と研究活動の役割もっています。教育実習は、幼稚園教諭免許状を取得するために必要な実習として、主に教育学部で乳幼児教育を学ぶ学生が来園します。今年度も5月の連休明けから、最初の実習期間が始まります。また、教職大学院に在籍する学生が「実地研究」として、定期的に来園する実習も受け入れています。今年度は4月から主に2組の保育に参加している大学院生がいます。他にも、一年を通して様々な人の出入りが多くありますが、ご理解、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

もう一つの役割である研究活動について、今年度は『遊び』とは何でしょうか」というテーマを設定しました。幼稚園での「遊び」、幼児期に「遊ぶ」ことに大きな意味を見出して、これまでの本園の保育を進めてきました。

では、なぜ「遊ぶ」ことが大切なのでしょうか。

子ども期を過ごす人は、なぜ「遊ぶ」のでしょうか。

「遊び」にはどのような意味があるのでしょうか。

子どもは何かを「学ぶ」ために「遊ぶ」のでしょうか。

「遊ぶ」とは、どのような姿を言い表しているのでしょうか。

そのような「遊び／遊ぶ」に関する問いに対して、改めて保育実践の場から応えてみようという試みです。

「遊び」というと、鬼遊び、ごっこ遊び、積み木遊び、わらべ歌遊び、言葉遊び、伝承遊びなど、「〇〇遊び」と名付けられたものを数多く思い浮かべることができます。一方で、例えば、飛行機雲が伸びたり消えたりする様子をじっと見ている姿も、子どもが「遊ぶ」姿だと感じます。また、水道の水をジャーっとひねって、その勢いを繰り返し歓声を上げている時、大人の側からすれば止めてほしい行為ですが、子どもにとって一つの「遊び」かも知れません。

研究活動では、日々の保育を参観いただいたり、年3回実施の公開保育研究会（地域の園の先生方などが参加する会です）で助言をいただいたりする形で、大学（教育学部）の先生方とも連携を図りながら、考えを深めていく予定です。本園が今後も、「遊び」や子どもたちの「遊ぶ」姿を大切にしたい保育を進めていくために、その意味を確かなものとして整理してみたいと考えています。

（副園長）





## 1くみ

### 「名前とマーク」

暖かい日差しの中、初めて保護者の方と一緒に登園した入園式の日から20日程が経とうとしています。子どもたちはそれぞれに園での生活を楽しくしながら、少しずついろいろなことをやってみようとする姿が見られるようになってきました。それぞれにとってこの1か月は、毎日が出会いの連続の日々であったことでしょう。いろいろな出会いと同時に、その名前にも触れていくこととなります。「1組」というクラスの名前や玩具の名前、先生の名前など、いろいろなものや人の名前に触れています。

クラスのみんなど過ごす中で、名前を呼ばれて安心する気持ちを感じたり、少しずつ一緒に過ごす友達の名前も知ったりしていければと思います、『どこでしょう』という歌を歌っています。「○○ちゃん ○○ちゃんは どこでしょう」の歌詞に合わせて、その名前の友達がどこにいるかをみんなで探します。自分の名前を呼ばれてなんだか嬉しそうな人や、「はい！」と手を挙げる人、友達の名前を聞いて真っ先に見つける人など、楽しみ方は人それぞれですが、降園前などにみんなで集まって過ごす楽しみの一つになっています。

名前を呼ばれることの他に、保護者の方に描いていただいた個人用のマークも子どもたちの安心感につながるものになっています。靴箱、ロッカー、引き出しなど、いろいろなところに自分のマークが貼ってあります。朝登園してきて、自分のマークを「あった！」と見つけると、なんだか安心するようです。

大切な自分の名前や、自分の好きなものが描いてあるマークは、園生活の中で家庭との繋がりを感じることができるものです。これらの安心感を基盤に、のびのびと、自分らしさを大切に過ごしていけるよう支えていきたいと思います。





## 2くみ



### 「新しい生活の始まり」

新しい保育室、新しい友達、新しい先生との出会いから3週間が経ちました。

入園式の朝、遊びのきっかけとなるよう、保育室の端に少し飾りをつけておきました。それを見つけたAさんとBさんが「新しい友達が来るから、お部屋はかわいい方が楽しいよね」と、さっそく2人で飾りを作り始めました。すると、他の人たちも集まってきて「もっと長くしよう」「お部屋の中じゃ足りないから外にも繋げよう」と、作った飾りが完成すると、新しい友達に見てもらうことを楽しみにしていました。飾りを作ったことをきっかけに、新しい友達と出会うことを楽しみにする気持ちをもつことができたようでした。

入園式が終わり、いよいよ27人の2組での新しい生活が始まりました。進級児のみんなは、緊張の中に2組になれるわくわく感をもちながら、新入園児のみんなは、初めての環境にどきどきしながら過ごしていました。数人の人たちと一緒に絵本『もぐらバス』を読んでいると、「ぼくももぐらバスに乗りたい」という声があり、もぐらバスを作ることになりました。「2組のみんなが乗れるくらい大きいやつにしよう」と、ダンボールを繋ぎ合わせてみんなが乗れる大きなバスを作ると、たくさんの運転手さんが登場しました。『バスに乗って』の歌に合わせて、大宮、浦和、アメリカなどみんなが行きたいところに出発したり、「乗せてください」とお客さんが乗って来たり、いろいろな友達と一緒に過ごすことを楽しむ場となっていました。

遊びがいろいろな友達と関わるきっかけとなり、少しずつ“幼稚園で過ごすのが楽しいな”と思いながら生活する姿が見られるようになってきました。まずは、幼稚園の中で居心地が良い場を見つけたり、いろいろな友達と関わる楽しさを感じたりしながら過ごせるよう、子どもたちの生活を支えていきたいと思っています。

### 3くみ

#### 「春の楽しみ」

新しい一年が始まり 1 ヶ月が経とうとしています。好きな遊びに夢中になる姿が見られます。これから、どんなおもしろいことを考えたり創ったりしていくでしょうか。

春の風を感じながら過ごす嬉しい季節です。草花を無心で摘める春は、幼稚園では 2 度か 3 度です。今日の風を、子どもたちと共に十分に味わっていきたいです。

先日、子どもたちと自然観察園に出かけて行き、桜の葉やヨモギを見つけて、香りや手触りや色など、いろいろに感じてきました。そして摘んできた葉で色を出し、白い布を染めました。ある人は、葉っぱが緑だから、きっと緑色のお水になると思っていたら、桜の葉は淡い黄色のような色、ヨモギはお茶のような色になり、目を丸くしていました。

次は、幼稚園のツツジを見つけて、色を試してみました。「やっぱり桜の葉みたいな色になるんじゃない？」と、予想していた人もいました。わくわくしながら収穫し、ふんわりと甘い香りに包まれながら混ぜたり押ししたりしていると、優しいピンク色になりました。真っ白の布が意外な色に染まって楽しいです。

どうやら桜は、葉より幹の皮の方が綺麗な色が出るらしいのです。それも、桜の花が咲くまでの冬の幹は、桜色を溜め込んでいるからなのだから。目に見えるのはほんの一部で、知ろうとしないと分からない不思議さも魅力だと思います。子ども一人一人もそうですね。見えているところだけでなく、心の内もよく見たり聴いたりしながら、その人をよく知りたいと思います。そして、どんな自分もかけがえのない存在であるということを、自分自身が信じていけるような関係を築いていきたいと考えています。

